遊星人の海外研究記 その21 ～家がなくても万引きに間違えられても C'est la vie ― パリで生き抜く研究サバイバル記～

川村 太一[1]

1. はじめに

はじめてフランス,そしてヨーロッパの地に足を踏み入れたのは,2009年10月のことでした.当時,博士課程の2年目だった私は,たった一人でパリのシャルル・ド・ゴール空港に降り立ちました.「これからフランスで生活するのだから,まずはフランス語を学ばなければ!」と思い立ち,あえて標識のフランス語の部分だけを見て歩いていたところ,見事に空港内で迷子になり,「『右も左もわからない』とはよく言ったもんだな……」と自嘲したのを覚えています.そんな訳のわからない意地を張っていた当時は,まさか自分がこの国でこれほど長く,多くの時間を過ごすことになるとは想像すらしていませんでした.学生として約15ヶ月,その後, ポスドクとして4年間,そして現在のパーマネント職を得てから8年以上と,気がつけば合算で13年以上の年月をこの地で過ごしてきました. 言語も文化も,そして生活空間も全く異なる国での暮らし自体がすでに大冒険ですが, 現在の職に就いてからは,日本とは全く異なる大学の習慣や文化,複雑な制度などに右往左往しながらも,なんとか今日まで過ごしてきました.この海外研究記では,そんな経験を通じて感じたことや学んだこと,そしてそもそも「なぜ私がフランスでこれほど長く働くことになったのか」というその経緯などについて,ご紹介したいと思います.

1.パリ地球物理研究所/パリシテ大学
kawamura@ipgp.fr

2. なんで私がフランスに?

他分野や一般の方々とお話しする際,よく「なぜフランスに?」と尋ねられます.惑星科学分野の皆様には今更言うまでもないことかもしれませんが,私が所属するフランスのInstitut de Physique du Globe de Paris(IPGP:パリ地球物理研究所)は,1世紀以上の歴史を誇る,世界有数の地球・惑星科学の総合研究機関です.地球内部構造から表層の地震・火山活動,自然災害の軽減,さらには太陽系天体の進化解明まで,広範な領域において先導的な研究を展開しています.日本の学術界とも強固な協力体制を築いており,JAXA「はやぶさ2」ミッションによる小惑星試料の分析への参画や,東京大学地震研究所との公式パートナーシップに基づく共同研究・人材交流など,日仏を繋ぐ国際的な連携を力強く推進しています.実は,地球物理学者でもある伊与原新氏の小説『磁極反転の日』のクライマックスにおいて,IPGPの研究者がとある発見をする場面が描かれています.異国の地で日本の小説を読んでいて,自らの所属先の名を目にし,個人的には思わず胸が躍ってしまいました.ご興味のある方はぜひ手に取ってみてください.

そんな中,私は宇宙惑星科学講座(L'équipe Planétologie et sciences spatiales) に所属しています.この研究室は,NASAの火星探査ミッション「InSight」に搭載された広帯域地震計(VBB) を開発した,惑星地震学および宇宙での地震探査をリードする存在です.VBBは,地球の観測用も含め,これまでに開発されたなかで「最も高性能な地震計」

とも言われており,火星での実績を経て,現在では月や火星のみならず,エンセラダスやカリストなどの氷衛星への応用も検討されています.今でこそ「惑星地震学」という言葉を耳にする機会が増えましたが,私が学生の頃は非常にマイナーな分野でした.私が研究を始めた頃でも,解析に使えるデータといえばすでに約30年前のアポロ計画のものだけで,世界的に見てもアクティブな研究者はごくわずか.その数少ない一人こそ,私の恩師であり,現在の上司でもあるPhilippe Lognonné教授でした.Lognonné教授は,かつてロシアの「Mars 96」ミッションに搭載予定だった地震計のPIを務めるなど,この分野を牽引してきた人物です.そんな教授が,当時私が学生として所属していた宇宙科学研究所(宇宙研)の研究会を訪れたこと.それが,私とフランスの“ご縁”の始まりでした.当時は月周回衛星「かぐや」が現役で活動しており,その裏で月着陸機「SELENE-2」の検討が進んでいました.そこに日仏共同開発の地震観測システムを提案するため,宇宙研で共同研究会が開催されたのです.そこで指導教員であった田中智教授が「明日の研究会で少し時間が空いたんだけど修士論文の結果を発表しないか,最悪日本語のスライドで発表だけ英語でもいいから」という無茶振りをしてきました.かなり突貫工事で仕上げたものの,その発表がきっかけとなり,博士課程の間に日仏共同博士課程(cotutelle:コチュテル)の学生として渡仏することになりました.これが私のフランス生活のスタートです.残念ながらSELENE-2プロジェクト自体は中止となってしまいましたが,その際に開発していたフランス側の広帯域地震計技術が後の「InSight」に,日本側の短周期地震計技術が後のタイタン探査ミッション「Dragonfly」にそれぞれ引き継がれ,採択されることになります.現在,その双方のミッションで仕事をさせていただけているのは,今振り返っても本当に不思議で,素晴らしい縁に恵まれたと感じています.その後,Lognonné教授や,日本での指導教官である宇宙研の田中智教授のご指導のおかげで,無事に日仏双方から学位を取得することができました.ただ,当時はまだ日本で「cotutelle」や「ダブルディグリー」という言葉がほとんど認知されていなかった時代.大学の教務窓口で制度の説明をした際,担当者の方に「ポカン」とされてしまったのは,今でも忘れられない懐かしい思い出です.

その後,無事にInSightがNASAのDiscoveryクラスのミッションとして正式採択され,今度はポスドクとして再び渡仏することになりました.ミッション採択後に初めて採用されたポスドクということもあり,プロジェクトの立ち上げ段階から深く携わる機会に恵まれました.当初の予定では,私のポスドク任期が終わる頃に打ち上げが予定されており,それに向けて運用計画の立案や火星地震検出のためのデータ解析パイプラインの開発,検証用・火星模擬データの作成など,数多くのタスクを任せていただきました.しかし,そんな順風満帆な日々に,地震計開発の思わぬトラブルが発生します.超高感度な地震計の内部は,微小な空気対流によるノイズすら防ぐため,極めて高度な真空状態に保たれています.ところが,どうやら「その真空が漏れているらしい」という試験結果が出たため,文字通り24時間体制での検証作業が始まりました.それまであまり試験に参加していなかった学生やポスドクも含めて,研究室のメンバー全体が3交代制を組み,1人8時間ずつシフトを担当してラボに泊まり込みで試験を続ける,そんな緊張感のある生活が続きました.

祈るような思いでの検証でしたが,残念ながら真空リークは確実なものとなり,予定していた打ち上げウィンドウには間に合わないことが決定的となりました.その延期の決定を告げるチームミーティングの,あの何とも言えない重苦しい空気は今でも忘れることができません.(当時, 学生としてフランスに滞在していた大阪教育大学の西川泰弘氏が,「フランス語で何を言っているかは全然わからなかったけど,『やばい』ってことだけは明確にわかりました」と語っていたのが,今となっては非常に印象的です.)実は当時,InSightの命運を巡り,「ある程度のノイズレベルの上昇を覚悟してでも,予定通りの日程で打ち上げるべきではないか」という妥協案も議論されていたそうです.しかし,現在,実際に取得された火星のデータを目にしているからこそはっきりとわかりますが,もしあの時,劣化したノイズレベルのままで妥協して打ち上げていたら,今日報告されている大部分の火星地震は検出できていなかったでしょう.最終的にプロジェクトチームは,「2年遅らせてでも最高性能の地震計を開発して火星に送る」という決断を下しまし



図1. 所属するパリシテ大学にある通称「火星オペレーションルーム」. InSightの運用中はここで多くの時間を過ごし，科学的な解析から運用方針まで日々熱い議論を交わしました. 壁にはミッションや地震計のグラフィックが数多く飾られており，打ち上げの様子や地上試験の様子を見ることができます.

た.結果としてInSightの打ち上げは延期となりましたが,今振り返れば,これこそがミッションを成功へと導いた最高の「英断」だったと言えます.とはいえ,その英断の結果として,私自身のポスドク任期中にはInSightが打ち上がらないことが確定してしまいました.こうして私は，志半ばで一度フランスを離れ，日本の国立天文台へと拠点を移すことになったのです.

その後,無事に真空リークの問題も解決し,正式に2年遅れでのInSightの打ち上げが決定しました.当時,国立天文台にいた私は,「はやぶさ2」や「MMX（火星衛星探査計画）」,さらには新しい小型探査ミッションの提案や検討に携わりながら,InSightの仕事も粘り強く続けていました.「ようやく打ち上げに至ったInSightになんとしても関わり続けたい,実際の火星地震データを自分の目で見てみたい」,そんな一心で,今後ミッションに関わるための方法を模索していた矢先のことです.恩師であるLognonné教授から,思いがけない連絡がありました.「InSightの打ち上げが決まったから,うちの研究室で正式に准教授を1名採用することになった.興味はあるか?」これまで長く関わってきたフランスという国に愛着はあったものの,さすがに「期限なしのパーマネント職」と言われると,人生の大きな決断に少し怯んでしまったのも事実です.しかし最後は,「やはり惑星地震学の最先端,そのフロンティアにいちプレイヤーとして挑戦し続けたい」という強い思いが背中を押し,覚悟を決めて公募に挑戦.幸いにも無事に採用され,現在に至ります.

こうして振り返ってみると,私のフランス生活は,偶然の素晴らしい出会いと,自身のキャリアのタイミングが「InSight」という大きなプロジェクトの節目と見事に重なったという,数々の幸運に恵まれて成り立っていると痛感します（図1）.その意味で,恩師であるLognonné教授には感謝してもしきれません.ただ一つだけ.採用面接の準備をしていた際,最初は「面接は英語で大丈夫」と仰っていたにもかかわらず,本番のわずか1週間前になって,「ごめん！やっぱ大学の規定でフランス語必須らしい！でも頑張って！」と連絡してきたあの無茶振りだけは,今でも小声で文句を言いたくなります.

3.「J'ai payé !（払った!）」から始まった語学サバイバル

海外に飛び出そうとする若手研究者にとって,一番の不安の種はやはり「語学」ではないかと思います.科学の世界の公用語は英語とはいえ,現地での日

常生活や様々な局面において現地の言葉が必要になる場面は多く,特に非英語圏に行こうとする場合は気になるところでしょう.実際,現在の私自身の日々の業務での言語比率を振り返ってみると,体感として「50%がフランス語,30%が日本語,20%が英語」といったところです.この比率は自分のキャリアステージ(学生時代,ポスドク時代,准教授)によって明確に変化してきました.学生時代はもちろんほとんど英語でしたし,ポスドク時代もInSightが大型国際ミッションだったため,公式なミーティングは基本英語,ローカルな議論や日常会話のみがフランス語という環境でした.しかし,パーマネント職である現在は,大学の業務や学生の指導なども加わり,フランス語の重要性が大きく増しています.

これを聞くと,「もしかして最初からある程度フランス語が話せたのでは?」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが,それは完全な誤解です.実は私が初めて渡仏した際,本当に「最低限のフランス語すら覚えていかない」という愚行を犯していました(お恥ずかしい話ですが,当時は「パリジャン」という男性名詞と「パリジェンヌ」という女性名詞の違いすらよく分かっていなかったレベルです).理由は単純で,「大学の中は英語で大丈夫だろうし,それ以外もなんだかんだ英語でなんとかなるだろう」と,完全に楽観視していたからです.

しかし,その甘い考えは渡仏してわずか数日で無残にも打ち砕かれることになります.渡仏前,研究室の秘書さんが「こちらの家探しは研究室の方でやっておくからね」と仰ってくださっていたため,私は住まいに関して何も心配せずに直接パリのラボに向かいました.ところが,そこで秘書さんから告げられたのは,「ごめん!予定していたアパートに住めなくなった!とりあえずホテルを押さえたから,しばらくそこにいて!」という衝撃的な内容でした.今となってはよく分かりますが,フランス,特にパリは常に深刻な住宅不足です.学生向けの安いアパートは非常に競争率が高く,学生同士でのルームシェアも珍しくありません.そんな事情も知らずにのんびり構えていた私は,あてが外れてホテルを転々とするサバイバル生活を余儀なくされました.「状況は遅々として進まないし,もう待っていられない!」と一念発起した私は,自分で直接,街の不動産屋に乗り込むことにしました.付け焼き刃で調べたフレーズを握りしめ,なるべくフランス語を使わずに済むよう,店先で *"Est-ce qu'il y a quelqu'un qui parle anglais ?"*(誰か英語を話せる人はいますか?)と尋ねたのですが結果は,あえなく撃沈.その後,事前に調べたメモを片手に「自分は近くの大学の学生で,家を探している」となんとか伝えようと試みたものの,全くコミュニケーションが取れず,何の成果も得られないまま肩を落としてホテルに戻ることになりました.幸いにも,その後偶然知り合った日本人の方にパリ在住者向けの情報誌などを教えていただき,そこで物件を契約することができました.結果的には秘書さんを頼るよりも早く家を見つけることができ,さらにパリの日本人コミュニティとも繋がることができたため,終わり良ければすべて良しではあったのですが,「フランスでは英語だけでは生きていけない」という現実を痛感した最初の洗礼でした.それでも,「まずは研究が最優先」という思いがあったため,当時の語学学習は“そこそこ”のペースでした.

そんな私の語学に対する態度に,真の転機が訪れたのは,渡仏から2ヶ月ほど経った頃です.ある日,いつものようにスーパーで買い物をし,会計を済ませた後に一品買い忘れに気づきました.すぐに店内に戻り,その商品だけを手に取ったのですが,再びレジの長い列に並ぶのが面倒だったため, セルフレジを利用することにしました.会計を済ませ,袋には入れずに商品をそのままポケットにねじ込んで退店しようとしたその瞬間,私の倍はあろうかという巨漢の警備員に呼び止められたのです.わけも分からず裏のオフィスに連行され,どうやら「ポケットの中身を全部出せ」と強い口調で言われているようでした.状況からして,私が万引き犯だと疑われていることは一目瞭然です.極限の緊張と焦りの中,私は素直にポケットの品物とセルフレジのレシートを同時に差し出し,自分の知っている最大限のフランス語で,「J'ai payé ! J'ai payé !」(払った!払った!)と,ただひたすら連呼しました.幸いにもレシートの内容が一致したため誤解はすぐに解け無事に解放されましたが,この時の恐怖と無力感は筆舌に尽くしがたいものでした.この日を境に,私の真剣かつ必死なフランス語学習の日々が始まったのです.

相変わらず大学の中では基本英語でしたが,通学

などの移動時間は基本フランス語のインプットに充てました.MP3プレイヤーにNHKのラジオフランス語講座の音声を取り込み,電車の中で内容を完全に理解できるようになるまで繰り返し聴き続けました.また,タイミング良くクリスマス休暇に入ったため,その休暇を丸々使ってフランス語の教科書を1冊読み切りました.その際に意識したのは,「英語と似ているルール」と「全く違うルール」を明確に分類して把握することです.幸いなことに,フランス語は英語と共通する語彙や構造も多いため,「似ている部分」を意識して活用するだけでも,短期間でかなりの会話が成り立つようになってきました.

そして,私のフランス語学習を最も力強く支えてくれたもう一つの味方が,「日本や日本語に興味を持つフランス人の存在」でした.パリには, フランス語を学びたい日本人と,日本語を学びたいフランス人が集まる言語エシャンジュ(échange linguistique:言語交換)のサークルがあり,私はそこへ積極的に参加するようにしたのです.そのサークルでは週に2回カフェに集まり,「1日はフランス語を学ぶ日,もう1日は日本語を学ぶ日」というルールで活動していました.フランス語を実践的に学ぶことはもちろんですが,「自分の母語である日本語の構造を,相手に分かりやすく教える」という経験自体が,言語の論理的理解において非常に貴重なトレーニングになりました.ある程度の意思疎通ができるようになってからは,こうしたサークルに足しげく通い,ひたすらネイティブと会話をするという実践を繰り返しました.かなり泥臭くラフな学習方法ではありましたが,この「切実な体験」と「実践の繰り返し」のおかげで,日常会話はなんとか現地で生活できるレベルへと上達していきました.

次に皆様が気になられるのは,「それでは,どのようにして研究現場で議論に使えるレベルにまで引き上げたのか」という点かと思います.結論から申し上げますと,これについては完全に「大学の研究現場で泥臭く実地経験を積んだ」というのが私の学習メソッドでした.

当然ながら研究の世界には独特の専門用語や言い回しが数多く存在し,それらは結局のところ現場でしか学べません.しかし,最低限の日常会話ができるようになると,フランス語のミーティングに参加しても「今,何のトピックについて話していて,何が問題になっているのか」という大きな流れはある程度「追える」ようになります.特に自身の専門領域やプロジェクトに関する議論であれば,すでに十分な背景知識を持っているため,単語単位で分からない箇所があっても,文脈から大まかな内容を推測して追えることが増えていくのです.

そこで私は,「ミーティング中に耳にしたけれど分からなかった単語をメモし,文脈から意味を予測しておき,後から調べて答え合わせをする」という作業を習慣にしました.この答え合わせの習慣は,現在のパーマネント職に就いてからもずっと続けています.もちろん時には,「議論の非常に重要なポイントだということは分かるけれど,細部まで正確に聞き取れなかった」という場面に直面することもあります.そうした時は体面を気にせず,「申し訳ないけれど,ここは重要ポイントだから間違いなく理解したい.英語でもう一度説明してくれないか」と頼むことも決して少なくありませんでした.

ポスドク時代,プロジェクト関連のミーティングが増えていく中でこうして着実に表現のストックを増やし,少しずつ研究の議論にもフランス語で直接対応できるようになっていきました.幸いにも,フランス語の科学・学術用語の多くは英語と語源が同じで似ているという点も,習得の大きな助けになったと感じます.こうした泥臭いインプットとアウトプットをポスドクの4年間続けた結果,二度目のフランス滞在を終えて離れる頃には,基本的にミーティングもフランス語で対応できるようになり,プレゼンテーションをフランス語で行う機会も着実に増えていました(図2).

この一連の経験を通じて強く感じたのは,「学んだ用語や表現は,辞書で調べて意味を知っただけでは決して定着せず,実際に自分で使ってみて初めて記憶に刻まれる」ということです.意味を知っただけで満足してしまうとすぐに忘れてしまうため,「せっかく調べたのだから,次のミーティングではこの表現を使ってみよう」「今回の報告では,あえてこの専門用語を使って説明してみよう」と,常に意識的にアウトプットの機会を狙うようにしていました.文法から一から真面目にコツコツ学ぶタイプではなく,完全に「現場実践型」であった自分にとって,この点を意識し続けたことは非常に重要だったと思います.

おかげさまで,現在は,講義や大学の運営業務,教

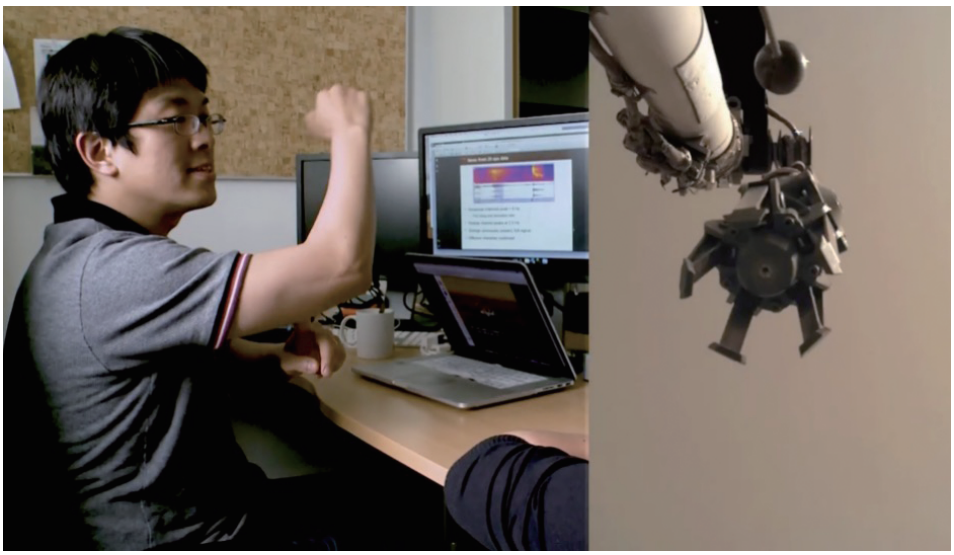


図2. 大学の広報動画にて，火星地震の検出方法を解説する様子． 画面の波形データを指し示しつつ，身振り手振りも交えてフランス語で説明中．言葉の壁を越えて熱意を伝える上で，ジェスチャーも立派なコミュニケーションツールの一つです(https://www.youtube.com/watch?v=V5CbVQic0lE&list=PLeutYo3rvk6rgtUKZ2PU4EsSo4e2VRLLy&index=5より転載．パリシテ大学の広報用の動画シリーズ，SEIS: le sismomètre de Marsの一部として公開中)．

務関係のやり取りも基本的にはすべてフランス語でこなせるようになりました．ただし，やはり今でも私自身の中では「永遠の勉強中」という感覚は拭えません．講義の直前には緊張感から重要表現を調べ直すことは欠かすことができず，何年経っても授業準備が一向に楽にならないのは，今なお尽きない悩みのタネです(以前，学期末に行われた学生による授業評価アンケートの中で，「フランス語で質問したのに通じない先生がいた」と書かれた時は，さすがに冷や汗をかいて焦りましたが……)．

余談ですが，フランス語は非常に表現力が豊かで，歴史に根ざしたユニークな慣用句が数多く存在する言語です．こうした慣用句は，単語を文字通りに解釈しようとしても全く意味が通じません．最近の研究室の同僚たちの定番のイタズラは，私との日常会話の中にわざとそうした難解な慣用句をさりげなく盛り込み，私の「ギョッとした表情」を大いに楽しんだ上で，得意げにその意味を教えてくれるというものです．

このように，私は渡仏当初の失敗に始まり，今に至るまで非常にサバイバルな姿勢で現地の言語と向き合ってきました．「必要は発明の母」とよく言いますが，科学の世界においても同様で，「そこで生き残り，研究を進めるため」という明確な必要性と実践の場さえあれば，年齢や開始時期に関わらず十分な語学を習得することは可能である，私のこの泥臭い体験談から，そんな前向きなメッセージを皆様にお伝えできれば幸いです．

4. 授業時間は「買い取る」もの？フランス大学教員のリアルな教育事情

フランスの研究職にはいくつかの種類があります．例えば，フランス国立科学研究センター(CNRS)の専任研究者や，地球宇宙科学分野特有の専任観測研究職(CNAP)などが存在し，博士号取得者のキャリアパスも多様です(そもそもフランスでは博士課程学生への給付型奨学金・雇用が厳格に義務付けられている点も日本と大きく異なります)．そうした中で，私は大学に雇用されている『Enseignant-Chercheur(EC：教職研究者)』という立場になります．例えば，CNRSに雇用されている研究者(Chargé de RechercheやDirecteur de Rechercheと呼ばれる専任研究職)とは異なり，ECは明確に「研究以外に教育の職務」が規定されています．准教授であ

れば「年間192時間」教育に従事することが職務として厳密に定義されており，それに従って担当する授業の数や時間が割り振られていきます．着任当初は，まず単純にこのように時間単位で厳密にノルマが規定されていることに驚きました．この職に決まった際，同じ研究室の専任研究者職の同僚から「ECは結構授業が多くて大変だよ」と言われていたのですが，この明快なルールを理解して初めてその意味を実感することができました．

しかし，さらにここで面白いのが，この規定された教育時間も，実は様々な手段を使って「減免」したり，他の業務で「消化」したりすることができる仕組みになっている点です．最も分かりやすい例が，学部生や修士学生のインターンシップ（Stage：研修）の受け入れです．フランスの大学では，修士の学生が日本のように特定の研究室に所属して2年間ずっと研究に専念するという形式ではなく，普段は基本的に授業を受け，年度の終わりに修士1年であれば2ヶ月程度，修士2年であれば5～6ヶ月程度の長期インターンシップを行います．日本のシステムで言えば，これらが卒業研究や修士論文に相当するものになります．例えば，このようなインターンシップの学生を研究室で受け入れて指導すると，「学生1人あたり教育時間10時間相当に換算する」といったルールが決まっており，この分だけ自身の担当授業時間を減らすことができるのです．

これ以外にも，例えば観測所の職員を兼務している場合は，「観測・運用業務に従事している」という理由で「教育時間22時間相当の減免」といったように，各種業務を授業時間の短縮に充てることが可能です．実は私が携わってきた火星探査機InSightの地震観測点は，フランスの国立観測所（SNO：Service National d'Observation）として認定されています．私はその専任職員（本職のメンバーが少なかったため，実質的な副所長業務）も兼ねていたため，この制度によって授業時間を大幅に短縮することができました．さらに興味深いのは，European Research Council（ERC）といった欧州の大型競争的資金に採択されると，なんと「そのプロジェクト予算を使って，自身の授業時間を大学から買い取る」ことまでできるのです．

実際に私の場合ですと，こうした観測所業務や大学の教務・管理業務などで約60時間分，学生インターンシップの指導で約10～20時間分を消費しているため，実際に教壇に立って講義や演習をしているのは，年間で100時間程度になっているかと思います．ただ問題は，このように非常に合理的かつ複雑なシステムになっているにもかかわらず，赴任当初にそれらをまとめた分かりやすい説明を聞く機会が全くなかった，ということです．一応，大学の公式資料には書いてあるようなのですが，その資料自体が「見つけにくい，とにかく長い，おまけに難解（しかも当然ながら全編フランス語！）」という状態だったため，結局のところ先輩教員を見様見まねで，手探りでルールを学ぶしかありませんでした．最近はすっかり制度にも慣れ，毎年担当する講義も固まってきたため，あまり授業準備やコマ数合わせで慌てることもなくなりました．しかし，時折，物理学演習や数学演習といった比較的「準備が楽で指導しやすい」とされている授業を新任の先生に譲ることになり，「来年はあの演習の担当から外れてくれ」と言われることがあります．そうすると，突如として足りなくなったノルマの教育時間を埋めるために，慌てて教務の担当者と掛け合い，新たな授業を探し回るというドタバタ劇を演じることになります．

最初はなんと複雑な仕組みだと感じたこのシステムも，慣れてしまえば数字として非常に明確に定義されており，教員間での不公平感も出にくいため，今では「実はとても合理的な素晴らしいシステムなのでは」と感じるようになってきました．とはいえ，本来の規定である「192時間」をすべて実際の講義だけで消費しようとすると，フランス式に1コマ2時間として計算しても年間96コマです．日本の大学で主流の90分コマなどに換算して考えても，1つの科目がだいたい13～14コマ程度ですので，毎年6～7科目もの異なる講義を担当する必要がある計算になります（実際に，私も様々な減免を挟みつつ，毎年4科目程度は担当しています）．日本の大学等で教育職に就かれている読者の皆様は，ご自身の現在の担当授業時間や業務バランスと比較されてみてはいかがでしょうか．日本とフランス，果たしてどちらの大学制度がより働きやすそうか，もし機会があれば，ぜひ皆様のご意見や実感も教えていただければ幸いです．

5. おわりに

少し長くなってしまいましたが,フランスで学生,ポスドク,そしてパーマネント職(教職研究者)と立場を変えながら,この異国の地で長く過ごす中で私自身が感じたこと,学んだことをご紹介させていただきました. 研究者にとって,海外へ出るというのは自身のキャリアにおける重要なステップアップの機会であると同時に,非常に心理的ハードルの高い挑戦でもあります.特にフランスのような非英語圏へ赴くことは語学の壁も大きくそびえ立っており,なかなか一歩を踏み出しにくいと感じられる方も多いことでしょう.しかし,私個人の泥臭い実体験から申し上げれば,結論は「確かに大変だけれど,思っている以上になんとかなる.むしろ,そこで学べることの方が圧倒的に多い」ということに尽きます.

単純に「外国語で発表し,議論する」という研究者に不可欠なスキルを高められることや,度胸がつくこと自体も大きな収穫です.ですがそれ以上に,そうした「追い詰められたサバイバルな環境に身を置くからこそ,いざという時の臨機応変な対応力や,困難な問題に直面した際のタフな解決力が培われる」のだと感じています.月並みな表現にはなりますが,これこそが真の意味での「本質的なコミュニケーション能力」なのだと思います.たとえ流暢な語学力がなくとも,相手の意図を自身の専門知識や文脈から補完しながら理解する.限られた語彙であっても,自分の考えを最大限に伝えようと工夫する.必要であれば,体面を気にせず適切な相手に協力を仰ぎ,相談する.「分かったつもり」をできる限り無くすために,泥臭く何度でも確認する.異国の地という困難な環境に置かれているからこそ,こうした基本的なコミュニケーションの姿勢を大切にすることが,実は研究プロジェクトを成功へと導く最短の近道なのだと思います.そして,この現場で鍛え上げられた「サバイバルな対話力」は,将来的に日本にいようが海外にいようが,研究者として活動していく上で間違いなく強力な武器になります.

そのためには,何はともあれ「その泥臭いコミュニケーションの過程そのものを面白がり,楽しむこと」が大切なのかもしれません.たとえ自分から積極的に会話の輪に入っていけなかったとしても,「今,あの人たちは何を議論しているのだろう」と聞き取りに専念してみたり,同僚が使っていた面白い専門用語や変わった慣用句をこっそりメモして集めてみたり.あるいは,「新しく覚えたこの表現を,次のミーティングの議論で使ってやろう」と今か今かと待ち構えてみたり.アプローチのやり方は本当に人それぞれ,無限にあると思います(ちなみに私は,これらをすべてやりました).もし今,語学や環境の変化への不安から,海外へ出ることを躊躇されている方がいらっしゃれば,どうか思い切ってその第一歩を踏み出していただければと思います.人間,追い詰められれば思っている以上になんとかなるものです.そして,現地で身につくその「サバイバル力」は,間違いなく今後の研究人生を支えるかけがえのない財産になるはずです.かつてシャルル・ド・ゴール空港で「右も左もわからない」まま迷子になっていた男が,右往左往しながらも一歩ずつ前進し,13年以上も働けているのですから.

著者紹介

川村 太一

パリ地球物理研究所/パリシテ大学准教授. 東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻博士課程修了. パリ地球物理研究所ポスドク研究員, 国立天文台RISE月惑星探査検討室特任研究員を経て2018年4月より現職. 専門は惑星地震学,内部構造探査.